

「M:i:Ⅲ」

☆☆☆

2006（平成18）年7月9日鑑賞

<敷島シネポップ>

監督：J. J. エイブラムス

イーサン・ハント／トム・クルーズ

オーウェン・デイヴィアン／フィリップ・シーモア・ホフマン

ルーサー／ヴィング・レイムス

マスグレイブ／ビリー・クラダップ

ジュリア／ミシェル・モナハン

デ克蘭／ジョナサン・リス＝マイヤーズ

リンジー／ケリー・ラッセル

ゼーン／マギー・Q

ブラッセル／ローレンス・フィッシュバーン

ベンジー／サイモン・ペッグ

U I P 配給・2006年・アメリカ映画・126分

<『M:i』シリーズはトム・クルーズの「十八番」だが・・・？>

トム・クルーズは今やハリウッドのトップスターとしての地位を揺るぎないものにしているが、一躍彼を世界的大スターに押し上げたのが1986年の『トップガン』なら、彼が「十八番」にしているのが、この『M:i』シリーズ。シリーズといっても、第1作が1996年、第2作が2000年、第3作が2006年だから、ペースはかなりゆったりしたものだが、第1作と第2作で全世界10億ドルを超える興行成績を記録したというからすごいもの。

他方、一般的評価はともかく、私の評価においては、『ラスト・サムライ』（03年）での彼の渋い演技は良かったが、『マグノリア』（99年）、『バニラ・スカイ』（01年）は全然ダメ（？）、また『マイノリティ・リポート』（02年）、『コラテラル』（04年）、『宇宙戦争』（05年）ももうひとつだった（？）だけに、トム・クルーズはやはり持ち味のアクションに活路を見い出すべき・・・？

<まずは最低限の基礎知識だけ・・・>

ここで『M:i:Ⅲ』を楽しむための必要最低限のポイントと、IMF（インボッシブル・ミッション・フォース）の人間関係を紹介しておこう。今回のトム・クルーズ扮するイーサン・ハントは、第一線を離れて、教官になっている身。そんなイーサンは、恋人ジュリア（ミシェル・モナハン）との婚約パーティーで大はしゃぎだが、そこへあるミッションが届けられてきた・・・。その任務は、彼の最も優秀な訓練生、リンジー（ケリー・ラッセル）が、ブラック・マーケットの商人オーウェン・デイヴィアン（フィリップ・シーモア・ホフマン）の監視任務に従事していたところ、突然拘束されてしまったため、その救出に立ち向かえというもの。例によって、その任務を命じたテープは5秒後に消滅してしまうが、さて彼はその任務を引き受けるのか・・・？

イーサンのボスはブラッセル（ローレンス・フィッシュバーン）で、その補佐官がマスグレイブ（ビリー・クラダップ）。そしてイーサンと現場で行動をとともにするチームメイトは、『M:i』I・II・Ⅲとフル稼働でお馴染みのルーサー（ヴィング・レイムス）の他、新顔としてデ克蘭（ジョナサン・リス＝マイヤーズ）と女性エージェントのゼーン（マギー・Q）の3人。そのチームワークはバッチリで、その手際よい活躍ぶりは何度観てもスカッとするもの・・・。

さあ、リンジー救出作戦の成否は・・・？そして、今回悪の権化となるデイヴィアンの周辺に飛び交う“ラビットフット”とは・・・？また、今回のイーサンのように、仕事は仕事、家庭は家庭と割り切って、ホントにいい仕事ができるのか・・・？婚約者のジュリアが事件に巻き込まれた場合、イーサンは一体どうするのか・・・？そんなこんな疑問と期待を持って、是非この映画を観てもらいたいもの。これ以上のネタバレは、この映画では厳禁だろう・・・。

<教え子の危機に教官が・・・、『スパイ・ゲーム』との共通点>

スパイ組織の教官と愛弟子という関係を見て思い出したのが、『スパイ・ゲーム』（01年）。これはCIA（アメリカ中央情報局）の優秀なスパイであったロバート・レッドフォード扮するネイサン・ミュアーが定年退職を迎えて、「優雅な第2の人生」に入ろうとするまさにその時、ブラッド・ピット扮する愛弟子トム・ビショップが中国の蘇州刑務所に拘束されたため、その救出に向かうという実に面白い映画だった（『シネマルーム1』23頁参照）。

スパイ映画ではアクションも必要だが、それ以上に知的好奇心を満足させる知能ゲームのハラハラドキドキの要素も不可欠。『007』シリーズでもそのどちらにウエイトを置くかは難しいが、初期の知能ゲーム重視路線に比べると、新作になるにつれて次第にアクションが強くなり、派手さ満開となってきた感が・・・。

『M:i』はもともトム・クルーズのアクションが「売り」だから、あまり深刻な知能ゲームにはウエイトがなく、あくまで現場におけるプロフェッショナルとしてのミッション遂行のサマが見どころ・・・。

それはともかく、第一線を引退した教官が教え子救出のために再度現役復帰というパターンは、これからいろいろと使えそう・・・？

ちなみに最近、某週刊誌の見出しで「ポスト小泉によって自民党はガタガタになり、参院選で敗退した後、小泉総理の再登板！」というのを見たが、元スパイの現役復帰はあっても、小泉総理の再登板はありえない・・・？

『スパイ・ゲーム』との共通点はこの基本設定だけではなく、48時間以内というのも同じ。そしてまた、イーサンとデイヴィアンとの最後の闘いとその結末は、蘇州ではないが上海近くの西塘（シータン）という中国のまちで・・・。

<トム・クルーズの私生活は・・・？>

ニコール・キッドマンと1990年に結婚し、2001年に離婚したトム・クルーズは、『ラスト・サムライ』で来日した頃は恋人のペネロペ・クルスを同伴していたが、間もなくこれは破局・・・。その後、『宇宙戦争』のプロモーションでパリを訪れたトム・クルーズは、2004年6月、エッフェル塔で、16歳年下のケイティ・ホームズにプロポーズしたというニュースが全世界を駆けめぐった。その後2人の仲は順調に進み、2005年4月には無事女の子も誕生。

しかし、今朝（7月9日）のテレビの芸能ニュースでは、ケイティ・ホームズがトム・クルーズと結婚するについて、①自分の両親を大切に、②2人でいる時間を持つ等々の「条件」を提示したと報じられた・・・。その内容は当然といえば当然のことだが、女からこんな面倒くさい「要求」がされてくる事態になれば、トム・クルーズはうっとうしくなって、また他の女に目を移すのでは・・・？

<あの全力疾走とジャンプはお見事！>

私のフィットネスクラブ通いは既に20年近くになり、生活の重要な一部として定着したが、ここ数年は日曜日毎に時速8kmで20km、2時間40分のランニングが習慣となっている。一時は10kmマラソンに数回出場し、タイムを競っていたが、その頃は時速12kmで練習を続けていたもの。しかし、今はタイムよりも持久力・・・？トム・クルーズは今年44歳となったが、この映画で見せる全力疾走の姿とジャンプの姿はサマになっており、実にお見事！何といってもすごいのは、あの腕の振り。若い頃は短距離走の選手をやっていたのではないかと思えるような疾走ぶりは、男の私が見ても魅力的。そんな見事な疾走ぶりの延長が、今回の『M:i:Ⅲ』でのハイライト（？）となる走り幅跳び・・・？つまり、真つ二つに切断された橋の一方から他方への命がけ（命知らず？）のジャンプ。その幅は何と4メートル半。トム・クルーズはこれを見事飛び越えるまでは出来なかったものの、ギリギリのところで橋にしがみついて落ちるところを踏みとどまり、ついに向こう側に渡ることに大成功。いやはや、見事なもの・・・。

<監督は指名されるもの・・・？>

映画づくりににおいては、監督が絶対的な存在であることが昔からの大原則。日本でも、黒澤明監督をはじめ、先日死去した今村昌平監督や黒木和雄監督らもその「絶対性」は同じ。監督を中核として集まる撮影や照明などのスタッフを〇〇組、△△組と呼ぶことから、その実態は明らか。しかし、この監督中心システムは今ではかなりサマ変わりしているようで、プロデューサー（製作者）から監督が逆指名されるというパターンも増えている。もちろん、「この映画の監督はあなたでなければダメ」と土下座して頼まれれば、それは監督冥利に尽きるもの。しかし、逆に「この映画の監督には是非私を使って下さい」と監督が競争入札するような事態になれば、それはナンセンス・・・？

トム・クルーズの俳優としての知名度+プロデューサーとしての顔、そして『M:i』I・IIの興行成績の実績の重視を考えると、この『M:i:Ⅲ』では、最初から「トム・クルーズ優位」であることは明らか。そしてそれを前提として、トム・クルーズから「監督してみたいと思うかい？」と聞かれたら、ほとんどの監督がオーケーするのは当然。そして、J. J. エイブラムス監督はそういう経緯の下でこの映画の監督となったことを認めているが、そんな力関係では監督が思うところの映画がつかれないことは明らか。もっとも、実態はそうであってもそういう力関係が作品の出来の悪さに結びつかなければそれでいいのだが、「トム・クルーズ絶対」という映画のつくり方を続けていれば、今後そういう弊害が出てくるのでは・・・？

<ポップコーン映画も時々ならいい・・・？>

今回の悪役となるデイヴィアンを演ずるフィリップ・シーモア・ホフマンは、『カポティ』（05年）で見事にアカデミー賞最優秀主演男優賞を受賞したが、これまでアート系映画で知られてきた俳優。したがって、その受賞直後に出演したこの『M:i:Ⅲ』は、ホフマンには珍しい娯楽超大作。そこで彼がこの映画に出演するについて語っている言葉が面白いので、注目したい。その第1は、「お金が目的でやったんじゃないよ」ということ。これは誰しもが願っている、並みの俳優ではなかなかできないし、言えない言葉。そして第2に、「甘いお菓子和同じで、ポップコーン映画もやり過ぎは良くないね。でも時々ならいいものだよ」というもので、これは名言。トム・クルーズも、この『M:i』シリーズのようなポップコーン映画だけではダメだと考えて、『マグノリア』や『バニラ・スカイ』などの演技力を要求される個性的な映画に出演したのだろうか、その出来はもうひとつ・・・。また、最近のハリウッド映画のシリーズモノ偏重やポップコーン映画偏重の傾向には大きな疑問が・・・。是非このホフマンの言葉を教訓としたいものだが・・・。